

別記様式 2 - 2 号

視 察 研 修 等 報 告 書



坂井市議会

議 長 戸 板 進 殿

会 派 名 一 進 会

代表者名 戸 板 進

1. 日 時 令和 6 年 7 月 3 日 (水) から 5 日 (金)

2. 視察研修先

- (1) かみしほろ情報館
北海道上士幌町字上士幌東 3 線 231 番地
- (2) 帯広市役所
北海道帯広市西 5 条南 7 丁目 1 番地
- (3) 美瑛町役場
北海道上川郡美瑛町本町 4 丁目 6 番 1 号

3. 視察研修内容

- (1) NPO 法人上士幌コンシェルジュの取り組み
- (2) 「フードバレーとかち」の取り組み
- (3) 「丘のまちびえい」の持続可能な観光の実現に向けた取り組み

4. 参加者 戸 板 進

5. 内容詳細

1 日目 (1) NPO 法人上士幌コンシェルジュの取り組み

上士幌コンシェルジュ設立の経緯

- ・ 2004 年平成の大合併で、上士幌町は自立の道を選択。「都市と農村の交流」によるまちづくりを目指す。
- ・ 2006 年「上士幌町交流と居住を推進する会」を設立し、移住体験モニターの受け入れを開始。体験モニター事業の充実に向けて提供住宅、受け入れ体制の整備が必要とされた。
- ・ 設立 3 年前、農商工連携事業で 3 年間補助を受け、ネットショップの立ち上げ準備を完了。
- ・ 2010 年「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル「NPO 法人上士幌コンシェルジュ」を設立。移住定住を主とした総合窓口となる。

移住定住(役場)、農林商工連携(商工会)、観光(観光協会)この 3 つの柱を団体の枠を

超え、「協働」と「相互補完」で支え、それぞれの業務だけでなく、他の団体の業務も一緒に行うことで効果の向上を狙っている。

委託業務

生活体験モニター事業管理運営業務

- ・お試し住宅 10 棟を管理(町 4 棟、法人 4 棟、理事が独自に建てた 2 棟)、住宅利用者の日程調整、受付、案内
- ・令和 5 年度の実績は、モニター 41 組 106 名、移住 5 組 11 名
- ・移住サイトの情報更新、町内の不動産情報を発信
- ・東京や大阪の移住フェア参加、上士幌町単独移住セミナー開催(東京、オンライン)

ふるさと納税感謝特典推進業務

- ・上士幌町、各事業者、生産者との連携
- ・発送に関わる作業状況の把握、発送伝票作成
- ・配送業者との配送状況の共有
- ・商品や情報の管理、寄付者からの問合せに対する事業者への連絡、調査、報告

自主事業

- ・旧豊岡小学校活用事業
カフェや商品開発の場として活用。約 300 坪の畑で、ジャガイモ、大豆、ハスカップなどを栽培
- ・上士幌情報館
フリースペースの解放、町の特産品販売
- ・上士幌町特産品
ネットショップ「十勝かみしほろん市場」運営

2 日目 (2) 「フードバレーとかち」の取り組み

帯広市は人口 16 万 3 千人。北海道の中央よりやや南東にある十勝平野のほぼ中心に位置し、面積は 619. 34 ㎢で、坂井市の約 3 倍の広大な面積を持つ。面積の 60%が平坦地、他は日高系の山脈地帯であり、三方を山に囲まれた場所である。気候は、夏は暑く冬は寒い大陸性気候で、年間を通じて晴天日数の多い全国で有数な地域である。市域面積の内 16. 5%は市街地で、畑作や酪農の農村地帯が大部分を占めており、農業を基盤産業として発展した所でもあり、専業農家も多くいる地域である。

フードバレーとかちは、現市長の「全国的に人口減少が続いていく以上、市町の税収が減っていくのは当然のことである。地域住民の収入を上げて税収を確保していく必要がある。」という強い考え、意志の元、地域の強みである農林漁業を中心として、雇用や経済の活性化を図り、収入増に繋がる取り組み支援について行政が率先して支援を行うという内容。取り組みの中心軸は、「農業・食の成長産業化」、「新産業創出・食の高付加価値化」、「十勝の魅力発信」という 3 つの柱を立てて実施されており、現在では、十勝地方で開発された製品を全国や世界に情報発信するなどして、成功を収めている多数の事例がある事についても学ばせていただいた。また、事業名の

フードバレーとは、米国カリフォルニア州にあるシリコンバレーの名前を参考に農林漁業を十分に発揮した食のシリコンバレーのような地域を目指しているとも伺った。

3日目（3）持続可能な観光の実現に向けた取り組みについて

美瑛町は北海道のほぼ中央部、旭川市と富良野町のほぼ中間に位置し、面積は東京都23区よりわずかに大きい67,678ha、人口は9,600人となっている。寒暖差が大きい内陸性気候のため、四季の彩りと移ろいを感じることができる。白金地域は十勝岳の麓に位置し、雄大な自然に囲まれた大雪山国立公園の一部となっているほか、丘陵地域は農業によって創り出される広大な自然景観があり、多くの観光客や写真愛好家を惹きつけている。こうした景観や地域資源を保護し、地域経済の発展に向けた取り組みとして平成17年に設立した「日本で最も美しい村」連合の理念に基づいた保全を行っている。

主要産業は、冷涼な気候と昼夜の寒暖差を活かした農業であり、12,600haの農地で水稻、アスパラガス、トマト、小麦豆類、ジャガイモ、ピート等多彩な農産物が生産されており、農業と観光を軸とした産業構造となっている。

観光分野の国連専門機関である世界観光機関（UNTWO）が推進するベスト・ツーリズム・ビレッジに認定された。北海道大学観光学高等研究センターの協力のもと策定した「美瑛町観光マスタープラン」は、「丘のまちびえい」の持続的発展を目指し、地域ブランドを確立させ、農林業・商工業・観光業の融合によって町の活性化を図ることを目的としており、その取り組みと豊かな地域資源をより良い形で次世代へと継承するため「美瑛町持続可能な観光目的地実現条例」の制定に至ったといった経緯などについて伺った。

6. 所見・感想等

1日目（1）NPO法人上士幌コンシェルジュの取り組み

上士幌町は人口約5,000人、牛約40,000頭、寒暖差60度の町であるが、合併せずに、「持続可能なまちづくり」を目指している。

この法人は、都市と農山村の共生・対流を目的とした『移住・定住・観光』に対し、『人・自然・食』などの既存の地域資源を最大限に活用したコミュニティビジネスに関する企画・コーディネート・運営事業を行っている。

また、地域の自立を目指し、住民の高いモチベーションの創造への昇華を目指すとともに、地域全体でのまちづくりに寄与することを目的として活動している。

まず驚くのが、人口約5,000人の町でふるさと納税額が15億あるとのこと。説明では、まだふるさと納税制度が始まる前、手製のチラシを作り、都市部など知り合いを通じ、最初はファックスにより注文を受けていたとのことであった。こういった行政に頼るのではなく、自らが地域の活性化につながる事業を展開しようとするのが重要ではないだろうか。

次に注目したのが移住定住についてであるが、自然動態による減少はあるものの、社会動態では転入者により増加している。これは法人も手掛けるお試し移住や、町の住宅新築補助、中学生以下の子ども1人あたり100万円、地元の事業者施工で更に50万円加算されることもあるのだろうか。

その他、法人では、旧小学校を改装し、豊岡ヴィレッジとして食堂やカフェ、イベントなどを展開している。

行政の補助金頼りだけではなく、地域の民間事業者が金と知恵を出し合い、地域のまちづくりを進めていることを強く感じた。

2日目(2)「フードバレーとかち」の取り組み

フードバレーとかちは、管内19市町村など産学官金41機関で構成するフードバレーとかち推進協議会を通じて取り組みを推進。地域の強みである「農業・食の成長産業化」、「新産業創出・食の付加価値化」「十勝の魅力発信」の3つの柱に2010年から展開し、「農業・食」の集積地を十勝に形成している。

また、道内の食産業の振興に大きく貢献し、食の研究開発・輸出拠点の形成に向け、一定の役割を果たしたとして、北海道フードコンプレックス国際戦略総合特区に認定されている。このことから投資額の増加や各企業との連携も多く、応援企業登録482社、ロゴマーク添付商品188品となり、食品工業の製造品出荷額等24%増となっている。

このほか、地域に創造的な新事業の種を生み出す「とかち・イノベーション・プログラム」を展開し、事業化24件、参加者630名を数え、2023年十勝での新設会社は229社となっている。

この地域を、坂井市に置き換えて考えてみると、平成30年に福井市を中心に嶺北10市町で形成した「ふくい嶺北連携中枢都市圏」があり、平成31年に作成された、ふくい嶺北連携中枢都市圏ビジョンを確実に実行していくことが必要であると考える。

3日目(3)持続可能な観光の実現に向けた取り組みについて

美瑛町は北海道のほぼ中央に位置し、札幌、旭川からや、東京からも、旭川空港経由で約2時間30分となっており、交通アクセスの利便性が高い地域である。

ヨーロッパの農村にも似た丘陵地帯が広がり、四季折々の美しい自然景観を求め、国内外の多くの観光客や写真家を惹きつけ、令和5年10月には、観光分野の国連専門機関である世界観光機関が推進するベスト・ツーリズムビレッジに認定された。

丘陵地には、日産スカイラインのCMに使われたケンとメリーの木や、セブンスター観光たばこのパッケージに採用されたセブンスターの木、両親が手をつないでいるように見える親子の木などが点在し、またラベンダーの咲きほこる風景は北海道の大地を感じさせるものであった。

しかし、これらの木は、町が観光地として紹介したのではなく、訪れた人がSNS上で紹介したことにより話題になったようである。

最近では、外国人観光客が増加し、道路上での撮影や、他人の畑に無断で入り込むことなどオーバーツーリズムとなっていることや、年間の観光客入込数200万人を超えているが、宿泊数が少ない、通過型の観光地となっていることが今後の課題であるとのことであった。

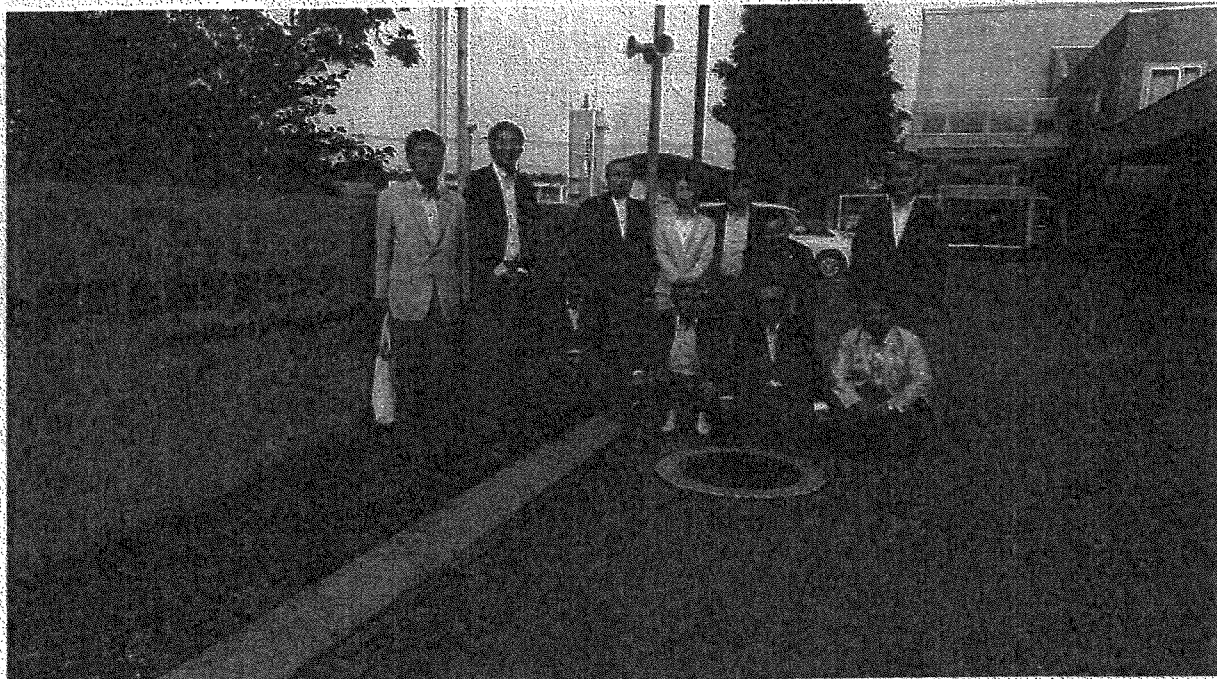
美瑛町では、持続可能な観光目的地づくりに向け、北海道大学、町内観光業、農林業、商工業関係者等で構成する委員会において、「美瑛町持続可能な観光目的地実現条例」を令和5年4月から施行している。

坂井市はオーバーツーリズムには程遠いが、宿泊者数が少ないことは共通の課題である。東尋坊再整備や、丸岡城周辺整備で観光地での滞在時間を長くすることや消費金額を多くするための工夫に今後期待したい。

今回の視察で強く感じられたことは、自分たちの先祖が開拓した地域を大切に守り、後世に繋げていきたいと思うことであった。

7. 添付書類（写真・コメント）

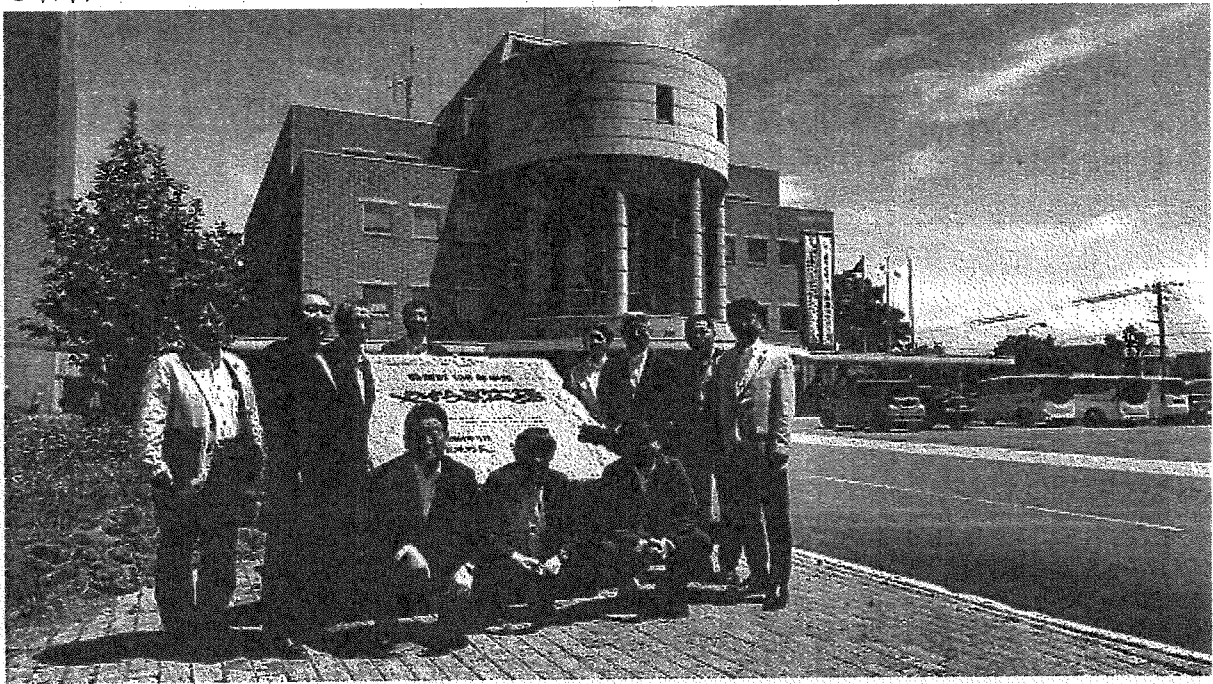
1日目



2日目



3 日 目



会 派 内 供 覧	

